

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 4月6日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520420

研究課題名（和文） 文内参与者の概念拡張可能性

研究課題名（英文） Plausibility of Conceptual Expansion of Nominal Participants

研究代表者

岡田 禎之（OKADA SADAYUKI）

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90233329

研究成果の概要（和文）：比較文における比較基準表現の概念拡張が認可される日本語型言語と、認可されない英語型言語を比較検討することを契機として、一般的に文内参与者の概念拡張が認めやすくなる場合は、どのような場合であるのかを様々に検討した。その結果、対象表現となる名詞句が述語によって語彙的に選択されている場合や、構文的に重要な位置を占める要素である場合など、文内参与者として際だつ要素と認められる場合であるという一般的傾向が認められた。

研究成果の概要（英文）：Starting with the typological survey of Japanese-type languages which allow the conceptual expansion of the comparative standard in the basic comparative construction and English-type languages which do not allow the same type of expansion, this research tried to identify the general conditions licensing the conceptual expansion of nominal participants in a given sentence. As a result, the following general tendency was found: the participant in question should be either lexically selected by the main predicate of the given clause, or ceded a salient status from the standpoint of the constructional meaning. In other words, conceptual expansion of a nominal participant is likely to be induced when that participant is regarded as a salient element in the clause.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：意味・概念拡張・際だち・語彙選択・比較基準・比較形態素

1. 研究開始当初の背景

名詞句が字句通りの指示対象の範囲を超えた、領域外の指示対象を指すという現象は、修辞学のメトニミーの研究などで盛んに行われてきているものである。しかし、どのような条件が整えば概念拡張が引き起こされるのか、といった認可条件を考えるという視点は、これまでの研究にはほとんど見受けられない。どのようなタイプの概念拡張があるのか、概念拡張の裏に潜む認知活動はいかなるものか、どのようなメカニズムで概念領域が引き起こされるのか、といった事柄は扱われても、どんな場合に概念拡張が引き起こされやすくなるのか、ということはさほど問題とはされてこなかった。本研究は、この問題を正面から取り上げようとしたものである。

2. 研究の目的

(1) 文内参加者がどのような統語的、意味機能的な位置を占めている場合に概念拡張が認められるのか、といった「概念拡張の適用環境」に関する議論は先述の通りこれまでほとんどなされてこなかった。例えば、I heard the trumpet. は楽器の名前で楽器の「音」を表しているという点で、字句通りの解釈ではなく概念拡張が生じていると言えるが、I heard about (of) the trumpet. と斜格表現になると楽器としてのトランペットという字句通りの解釈に制限される。The kettle is boiling. ではthe kettle という容器に言及することによって、中身の「水」を指し示すことができるのに対して、I put out the fire with the kettle. では「ヤカン」そのものを使って火を消すということであり、中身の水を使って火を消したとは解釈されにくい。同様の解釈傾向は様々な例に関して認められるものである。一般的には、文内参加者として、より中心的な位置を占める要素であるほど、概念拡張の可能性が高まり、周辺的な要素であるほど、概念拡張は難しくなりやすいという傾向にある。このような傾向は、プロファイルされた参加者に関して適正な解釈を与えるために行う探索解析と、プロファイルされていない要素に対する探索解析では、前者の方が理に適ったものであるということからも保証できそうである。しかし、どのような場合であってもこの解釈傾向が認められるというわけではない。たとえば、We need a strong arm in the right field. でも We could win the league championship with

a strong arm in the right field. でも、a strong armは野球選手を表すし、Bordeaux tastes especially good this year. でもThe meat soaked in Bordeaux has a special aroma. でもBordeauxはボルドー産のワインを指すことができる。どのような条件下で概念拡張が許されるのか、または許され得ないのかという問題についてのより細かい検討を行う必要がある。

(2) 比較構文においてThe population of Japan is larger than that of Korea. に対して*The population of Japan is larger than Korea. となることは、比較対象の並行性という要件で説明されてきたが、日本語はこのような並行性を破ることが指摘されている。「日本の人口は韓国(の人口)より多い」は容認性の高い表現であるが、なぜこのような差異が認められるのかということを考えてみたい。日本語の場合には「韓国」という表現で「韓国の人口」を表すという概念拡張が可能であるのに対して、英語ではKoreaという表現でthe population of Koreaを表すという拡張が許されていない、という問題として捉え直すことが可能であると考えられるが、この違いは英語と日本語に限られたものではない。英語以外にも、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語では拡張は認められず、逆に日本語以外でも韓国語、中国語、トルコ語、スワヒリ語では拡張が認められるのである。この差が何に起因するのか、他の言語にも同様の差異が認められるのかといった問題を検討していく。そして、(1)にあげた一般的な概念拡張の認可条件と合致する形で問題解決を目指す。

(3) どのような方向性を持った概念拡張が可能であるのかを調査するという課題も目的の一つとして掲げる。Pustejovsky (1995)などで用いられているQualia structureでは、名詞表現の意味構成を細かく規定する試みがなされており、Yoshimura & Taylor (2004)などではmiddle voiceの容認性に強く影響を及ぼすqualiaとしてtelic qualeが重要であるとされている。本研究で問題にしている概念拡張の方向性に関しても特に強く関わるタイプのqualiaが存在するのか、そしてもし存在するのであればそれはなぜなのか、といった問題を考察する。

(4) conative alternationのような交替現象を、この概念拡張という視点から観察してみることが可能かどうかを検討する。I shot the elephant. とI shot at the elephant. の場合、前者では銃から放たれた玉は着弾していることが含意されているとされる。つまり、shootした部分は「足」「首」「胴」などの具体的な身体部分であるはずであり、

「象」全体ではない。これは具体的な身体部位を言語化せず、より大きな概念である「象」という表現を用いて active zone discrepancy を引き起こしているとも考えられる。これに対して後者では「象にめがけて」銃を撃っているだけで必ずしも着弾しているかどうかは不明であるとされている。つまり、shoot する動作によって直接影響を受ける象の身体部位は特定が難しく、また具体的に発話者が想定できないと考えられる。銃で狙い撃っている対象は1匹の「象」としか限定できず、それ以上 active zone を限定することができない場合であるとも考えられる。ここでは「拡張」ではなくむしろ解釈を「制限」する方向になっているが、Active Zone Discrepancy の一例として、広義の概念拡張事例の一つととらえたい。従来、形式的な差異が意味解釈上の差異に反映される事例としてあげられてきた様々な交替現象に関して、概念拡張可能性という視点からの検討ができないかを考える。

3. 研究の方法

上記のような研究目的を達成するためには、多言語の話者への聞き取り調査や、コーパスを利用したデータ分析、多言語の reference grammar の確認などの作業が必要となる。また、仮説の検証には大量のデータを効率的に処理するための高性能のコンピューターや、資料の取り込み、保存に用いるスキャナー、IC レコーダー、メモリー機材などの機器が必要となる。

また研究成果の公表の場として、国内外の研究会や学会での発表、英語論文の投稿を目指す。具体的には、国際認知言語学会での発表やそれに準ずるフォーラムでの発表と、*Cognitive Linguistics* または *English Language and Linguistics* などの国際雑誌への投稿を行う。

4. 研究成果

(1) 検証の結果、「文内参与者として、より中心的な位置を占める要素であるほど、概念拡張の可能性が高まり、周辺的な要素であるほど、概念拡張は難しくなりやすい」という原則が観察できた。その一方で概念拡張された意義が慣習化される度合いが強くなるほど、その適用環境は広くなり、プロファイルされている参与者であってもなくても、概念拡張は可能になるという側面も存在している。これは、もはや概念拡張ではなく、その表現自体の意義として認定すべきステータスを確立しているとも考えることもできるかもしれない。しかし、このような事態も概念拡張の一例と考えた場合であっても、一般化できそうな内容として「プロファイルされていない参与者にだけ限って許されるような概念拡張解釈は存在しない」という結論が得られた。プロファイルされている要素の場合や、プロファイルされていない要素であっても慣習化の度合いが強くなれば、概念拡張は可能で

あるが、後者の場合はプロファイルの度合いとは無関係に与えられる解釈であるので、上記のような一般化が可能ではないかと考えた。

(2) 比較対象の並行性に関しては、比較構造を形成する形態素の配列のあり方との関係で説明できるとの結論を得た。英語では述語形容詞に比較の解釈を決定する形態素(-er/more)が付随し、主語表現についての記述内容として一貫している。比較対象の表現は純粹に付加詞的要素でしかないと考えられる。これに対して日本語では比較を表す形態素「より」は形容詞にはなく、比較対象表現に付随する。この比較対象部分が欠損すると、比較文ではなく、ただの叙述文になってしまう。つまり、比較対象要素の持つ相対的な重要性は、日本語の場合の方が高くなると考えられる。そして、この場合には概念拡張は可能となり、英語においては概念拡張は認められず、字句通りの解釈が要求されるのではないかと考えられる。また、このような違いは日本語と英語にとどまらず、英語型の言語（ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語）と日本語型の言語（韓国語、中国語、トルコ語、スワヒリ語）の体系的な違いにも結びついていると考えられる。このような概念拡張の認可は、(1)にあげた最初の一般的な概念拡張の認可条件とも合致するものである。

(3) Qualia との関連で、概念拡張の問題を規定することは、残念ながら本研究では手をつけられなかった、やり残した課題ということになった。これは、この問題を検討する以前に、例外的な概念拡張が生じる場合の認可条件や、その例外的事例をも含めた更に上位の統一的制約が規定できるかどうか、といったより緊急の課題が浮上してきたためである。現在この方面の調査を続けているが、いずれここで挙げた課題についても検討していく予定である。

(4) conative alternation との関連では、いくつかの具体的な現象事例の提示はできたものの、直接目的語と付加詞の対比の場合に比べると、明確な差異が認めにくいようであり、いくつかの現象提示にとどまる結果となった。今後、英語以外の多言語においても類例が観察されるかどうかなど、更に検討が必要となる課題である。

(5) 上記の研究成果については、(1)に関連する内容は主に論文②③⑤、研究発表①②で扱い、(2)に関する内容は論文②③④、研究発表①②で扱った。(3)に関する内容は論文、研究発表などに反映

されることはなかった。(4)に関する内容は論文①において扱った。また、当初目標としていた国際学会での発表と国際雑誌への投稿はどちらも一応達成できたと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①岡田禎之「概念拡張とテキストの結束関係」『玉井暉先生退官記念論文集』査読無. 2010: 139-149.

②岡田禎之「参与者の概念拡張と比較文形成」『「内」と「外」の言語学』査読無. 2009: 23-53.

③OKADA Sadayuki “Comparative Standards and the Feasibility of Conceptual Expansion.” *Cognitive Linguistics* 査読有 20 卷 2 号. 2009: 395-423.

④岡田禎之「比較基準要素の概念拡張について」『待兼山論叢』文学篇 41 号. 査読無. 2007: 1-17.

⑤岡田禎之「文内参与者の概念拡張可能性について」『ことばと視点』阪大英文学会叢書 4 卷. 査読無. 2007: 45-57.

[学会発表] (計2件)

①岡田禎之「参与者の概念拡張と語彙統語的、構文的、結束構造的要因」(招待講演)筑波大学フォーラム. 2008/3/8. 筑波大学.

②OKADA Sadayuki “Conceptual Expansion and Parallelism in Comparison.” 10th International Cognitive Linguistics Conference. 2007/7/16. Krakow, Jagiellonian University

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 禎之 (OKADA SADAYUKI)

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 90233329